

令和7年3月28日

「仏教抹殺（なぜ明治維新は寺院を破壊したのか）」 鶴飼秀徳 文春新書

明治維新の華やかな光の部分脚光を浴びていますが、その影の部分である「廃仏毀釈」。明治維新の「神仏分離令」を契機に日本中に仏教を否定し寺院や仏像を破壊する動きが広がった。私の郷里鹿児島では、その破壊は熾烈を極め、名刹・古刹は破壊され仏教の文化遺産はゼロという状況。またこの破壊がなければ日本中の仏教芸術の国宝は、現在の3倍の量になったといわれています。

中国の「文化大革命」やタリバンによる「バーミアン大仏の破壊」と同じ蛮行が、150年前に日本にも吹き荒れていた事実。

【発表の流れ】

1. なぜこのテーマを選んだのか
2. この本から分かったこと。
3. 我が国の宗教事情を物語るキーワード
4. 維新に吹き荒れた廃仏毀釈の動き。
 - ① 廃仏毀釈とは
 - ② 背景にあるもの
 - ③ 各地への拡がり
5. 雑感

1.なぜこのテーマを選んだのか

①革命や宗教戦争で民衆を突き動かした「ドグマ（理性による批判を許さない教理-教条）」で構成された水戸学をはじめとする正義の体系が、当時のわが国でも吹荒れていたのか！

②なぜ鹿児島では廃仏毀釈が徹底されたのか。この本を読むまでは、この歴史的事実を知らなかったこと。なぜ地域によっては、対応に差が生じてきたのか！

2.本から分かったこと

（政府法令からなぜに廃仏毀釈のアクションにつながったのか？）

・水戸学の影響下にあった明治政府が、仏教否定の旗振りをしたと思っていた。ところが、政府はあくまで神と仏の分離を促しただけ。それを受けた民衆の側が、率先して寺院の破壊を行ったという事実。

・火をつけたのは政府としても、民衆の側が過激化したのを過渡期である明治維新という断面を切取るだけでは理解できず、我が国の古来から培われてきた宗教事情も影響していることも勘案する必要。

3.わが国の宗教事情を物語るキーワード

【日本土着の神道】

神道には、仏教におけるブッダ、キリスト教におけるイエスのように特定の創始者は存在しない。同時に、経や聖書、イスラムのコーランのような經典や、そこから生まれる包括的な教義もない。(神道は宗教でないという見方もある。)

【仏教の受容】

仏教とともに文明がもたらされた(戦国時代のキリスト教への受容も南蛮文明と一体)。受容にあたって、崇仏派の蘇我氏と廃仏派の物部氏との論争(仏教公認論争)。蘇我馬子・聖徳太子の崇仏派の勝利で廃仏派の排除(宗教戦争)。当時の国際情勢からみて、豪族ごとに個別の神々を祭っている状態から仏教を中心に据えることで、中央集権体制の確立が急がれていた。

日本の豪族の圧倒的多数が、崇仏派の蘇我氏を支持したのは、この当時の日本人が神権政治よりも、新しい技術や社会制度によって文明的な進歩を願う古代的精神を持っていたためである。

【日本人の宗教観の元祖 聖徳太子】

日本土着の宗教である神道、インドから中国を伝い朝鮮半島を経て日本に流入した先進的である仏教と、中国で生まれた生活規範的道德律である儒教、この三つを習い合わせていく発想「神・仏・儒習合思想」。この発想は日本人の宗教観や文化観を決定し、様々な外国文化や技術を日本が取り入れる時の対応の仕方にも、大きな影響を残した。同時にまた、習合思想が根付いたため、それ以降の日本では、宗教は重要な対立軸ではなくなった。

【民族宗教と世界宗教の対等合併】

(本地垂迹説)

日本の神々の本体は仏であり、神々とは取りあえずこの世に現れた存在にすぎない。

【政教分離の確立】

織田信長による各地の一向一揆の平定、比叡山の焼き討ち。豊臣秀吉による高野山の武装解除。徳川家康による幕府の統治機構への寺社の取込み。

【神道と朱子学の合体】

平安時代に神道と仏教が習合し新しい信仰を生み出したように、江戸時代には神道は朱子学と習合した。これが「国家神道」と呼ばれているもので、当然それは後から生まれたプロテスタントが先行のカトリックを否定排除したように「旧教」である神仏習合を否定した。これが神仏分離、廃仏毀釈につながった。

「忠義」を日本に定着させるために大々的に武士階級に対して朱子学を奨励した徳川家康。朱子学は武士の基本教養となる。

但し、朱子学が忠義を尽くすべき真の主君「王者」は、覇者に過ぎない徳川將軍家ではなく天皇家であると日本人の多くが考えていくようになっていく。

【武士の基本教養となった朱子学】

廃仏毀釈の始まりは、江戸初期の名君と言われた水戸光圀と保科正之。

徳川家康はキリスト教を厳禁したものの、同じく独善性排他性を持つ朱子学を武士階級に奨励

したため、本来日本人が大いに嫌っていた独善性排他性が日本にも定着することになった。朱子学の持つ独善排他性と「王者は覇者に勝る」という信念は、「尊王攘夷」という国民運動にまで発展し、そのエネルギーが明治維新を成功させたのも事実だ。

倒幕し維新を成功させた人々も、そのバックボーンには天皇に対する信仰がある。ところがキリスト教はそうした絶対者を認めない。だが開国した以上キリスト教は解禁しなければならないから、維新政府は何とかキリスト教に対抗する国家原理を構築する必要に迫られた。⇒天皇の祖先神に対する信仰を強化することによって天皇の権威を高め国の統合原理にすることであった。⇒朱子学の影響を受けた人々は、その独善排他性に影響されて、平安以来の国民宗教の「神仏混淆」教から「外国の原理（野蛮）」である仏教を排除し神道を純化することが大切だと考えた。
*「朱子学」 唐の時代までの儒教では、規範のみが先行し、それを問答無用に一方的に押し付ける法文主義が横行していましたが、宋学の改革によって、道徳や理想が如何にあるべきかを問う論理思考、大義名分論が重視されます。儒教は単なる規範学から哲学へ変貌します。

【日本における寺院と神社の形態】

- ① 寺院と神社が単独で存在する。
- ② 寺院のなかに神社がある。
- ③ 神社のなかに寺院がある。

【江戸時代の寺院】

檀家寺（庶民のための墓を持つ） 祈願寺（為政者のための祈祷を行う） 門跡寺（天皇家ゆかり）

【檀家制度】

檀家制度は、菩提寺を事実上の戸籍管理者。キリスト教監視所&戸籍管理の下部機関として権力機構に組込んだ。江戸幕府の重要な政治課題は、社会の安定。かつて戦闘集団であった仏教を、武装解除したうえで檀家制度を強要し宗派間の信者獲得競争を無くした。ムチとして僧侶の肉食妻帯を国家の法律として取り締まった。

「檀家制度」に伴い、僧侶は幕府の民衆支配の手先として、またその墮落ぶりから民衆から目の敵にされた。また寺社領では年貢徴収者である僧侶に対する長年にわたる反感。

3. 維新に吹荒れた廃仏毀釈の動き

①廃仏毀釈とは! 「廃仏」とは仏教を廃し「毀釈」とは釈迦の教えを毀すこと。

(廃仏毀釈運動の概要)

新政府は万民を統制するために、強力な精神的支柱が必要と考えた。そこで、王政復古、祭政一致の国づくりを掲げ、純然たる神道国家（天皇中心国家）を目指した。この時、邪魔な存在だったのが神道と混じり合った仏教であった。

新政府は神と仏を切り分けよ、という法令（神仏分離令）を1868年（慶応四年）に出し、神社に祀られていた仏像・仏具などを排斥。神社に従事していた僧侶に還俗を迫り、葬式の神葬祭への切り替えなどを命じた。

この時点では、新政府が打ち出したのはあくまでも神と仏との分離であり、寺院の破壊を命じたわけではない。だが、時の為政者（藩主→藩知事）や民衆の中から、神仏分離の方針を拡大解釈するものが現れた。そして彼らは、仏教に関連する施設や慣習などを悉く毀していった。各地における廃仏毀釈が収まるのも意外に早かった。多くは1～2年ほどの間で破壊は止んでいる。キリスト教の解禁を含めて信教の自由が布達されると、廃仏毀釈は1876（明治九）年までに終息。

②廃仏毀釈の要因

○権力者への忖度

○富国策のための寺院利用

・ 寺社領の没収（上知令）、版籍奉還から廃藩置県につながる動き

○熱しやすく冷めやすい日本人の民族性

・ 人々は新時代の到来に、大いなる希望を抱いた。半面、古いものは過去の遺物として軽視され、寺院にたいする破壊行為に発展していった。時代の転換期における、大衆の熱狂が廃仏毀釈の運動として広がっていく。

・ いつの世にも政府の方針を笠に着て乱暴を働くお調子者、つまり「虎の威を借る狐」がいる。

○僧侶の墮落

③各地への運動の拡がり

神仏分離は政府の方針で、それを民間で拡大したのが「廃仏毀釈」運動である。

民間の運動であったので地方によってかなり程度の差があった。

なかでも廃仏毀釈が激しかった地域は、水戸・佐渡・松本・苗木（岐阜）・伊勢・土佐・隠岐・宮崎・鹿児島。この地域では、廃仏毀釈の背景、目的、やり方はそれぞれ異なるが、寺院が徹底的に破壊された。苗木・隠岐・鹿児島では寺院と僧侶が、地域から完全に消えた。

（神仏分離令以前の幕末の動きは水戸から）

水戸光圀は由緒ある名刹古刹保護した一方で、齊昭は大寺院に狙いを定めて破却を実施。齊昭は、欧米のキリスト教を中心とした宗教による政治支配に対抗できる強い宗教の枠組みと考えた。アミニズムの要素の強い神道には教義がない。神道に儒教の教学（朱子学）をもってきて、日本風アレンジし、「忠孝一致」などの新しい道德観を、神道に結び付けるかたちで生み出した（水戸学）。ただし理論先行型思想本位のため、民衆運動には発展せず。齊昭が実施した寺院整理による金属供出の考え方は、明治に入って、他藩の富国強兵策に移植されている。

（廃仏毀釈の最初の大きな行動は比叡山から始まった）

坂本で始まった廃仏毀釈の動きは、かの地だけで終息することはなかった。日吉神社の暴動は宗教クーデターの様相を呈し、瞬く間に全国に知れ渡った。そして波状的に各地に広がり、全国で廃仏毀釈運動が展開されていくのである。

日吉大社の暴動、長年、僧侶から虐げられてきた神官の逆襲に燃える気持ちは尋常ではなかった。それが民衆をも巻き込み、熱狂的な破壊活動まで発展したことは、新政府にとっても想定外。太

政官布告で破壊を戒めている。

(鹿児島 武士率 26.4% 全国平均 5.7%)

外城士制度のため武士が村々に配備されているため、寺請制度ではなく、武士が戸籍を管理。明治維新の英傑を育てたとされる郷中教育の画一的な教育の弊害。また郷中教育が藩全体に行き渡っていたため、寺子屋や私塾が少なく多様性の欠如につながった。

スタートは島津斉彬。水戸藩における廃仏毀釈の先例に注目。1876年の「信教の自由令」が出されて破壊行為は沈静化。他所では2~3年で収まっているのに対して、13年以上にわたって続いた。

(一方で維新の立役者の長州では)

実施されたのは、破壊ではなく、大々的な寺院整理だった。政策的な廃寺処分であって寺院の焼討など民衆による暴動の記録はほとんどない。寺子屋や私塾の数の多さから、庶民が寺院との関りが深かったことから。

(古都奈良も吹き荒れた廃仏毀釈)

興福寺や薬師寺なみの規模を持ち、延暦寺と同じく勅願によって建立された内山永久寺の破却。興福寺五重塔さえも町衆によってスクラップとして売却。寺社領の没収（上地令）が推進役に。

(譜代大名なるが故の過激化 松本・苗木)

旧佐幕派であった藩主の暴走から始まる。権力者（地方の首長）の中央への付度（新政府への必死のアピール）。当初は藩主の一存から始まったが、時代の風潮から民衆も反仏教に傾く。民衆運動に転化していった要因は、当時の僧侶が墮落し、大寺院のムラ支配によって、人々が苦しめられている事実があった。

4. 雑感

○宗教的政治的ドグマを背景に民衆を巻き込んだ運動は、勢い狂気を孕んだものになり、対立する勢力の殺戮に繋がっていく。仏像破壊はあるものの血が流されなかったことは幸いと言えるのでは！

○権力者への付度。これは人間社会である限りどこにでもついてまわるものか！スターリンの大粛清。反革命分子の摘発にあたって、現場ではスターリンの意向に沿うためにノルマ達成に向けて現場間での摘発数の競争になった。毛沢東の大躍進政策では、権力者に阿るため現場ごとに過大な申告になり、それが餓死者の増大に繋がった。

以 上